

令和５年度 第１回石狩市社会教育委員の会議 議事録（要約）

日 時 令和５年６月９日（金） １５時００分～１６時３０分

場 所 石狩市民図書館 視聴覚ホール

出席者

[出席委員（１０名）]

木村 純・大橋 修作・二上 朋子・出口 善久・山田 治己・高橋 容子・坂見 明信

永田 志津子・高橋 典只・松本 史子

[欠席委員（５名）]

船木 幸弘・近藤 宏・納谷 眞智子・渡邊 真奈美・大内 さつき

[事務局（４名）]

次長（社会教育担当）伊藤 学志 社会教育課 課長 斉藤 晶・主事 大澤 芽・主事 高津 柊

[傍聴者（０名）]

（事務局）

只今から令和５年度第１回石狩市社会教育委員の会議を開催させていただきます。初めに、木村委員長よりご挨拶をいただきます。

（木村委員長）

今日は残念ながら欠席の方が多く、少し寂しい感じがしますが、雨の中お集りいただきありがとうございます。現在、全国的にも豪雨が増え、強い雨が降ると少し心配になりますけれども、元気に進めたいと思います。

（事務局）

続きまして、新たに社会教育委員に就任された方をご紹介します。本年４月の学校人事により市校長会推薦の山田 聡委員の退職に伴い、校長会からの後任として委嘱しました坂見 明信委員です。

（坂見委員）

坂見と申します。よろしくお願いいたします。

（事務局）

会議の時間の都合上、委嘱状は席上に置かせていただいております。

続きまして、本年４月の市職員の人事異動により、新たに社会教育課へ配属になった職員がおりますので、自己紹介をさせていただきます。

（伊藤次長、高津主事あいさつ）

（事務局）

それでは、これ以降の議事進行につきましては、木村委員長にお願いいたします。

（木村委員長）

それでは、会議次第に従って進めさせていただきたいと思います。

○報告 令和５年度 石狩管内社会教育委員連絡協議会についての報告

（木村委員長）

最初に、皆さまのお手元にあります、「令和５年度 石狩管内社会教育委員連絡協議会」について報告させていただきます。

（資料に基づき委員長より説明）

○議事 令和５年度社会教育委員の取り組みについて

（木村委員長）

令和５年度社会教育委員の取り組みについてですが、私から説明させていただきます。

皆様にお配りした「報告 石狩市公民館でのコロナ禍の中でのサークル活動」という資料ですが、昨年の第１回社会教育委員の会議の際に、北海道社会教育委員連絡協議会、市町村社会教育委員連絡協議会からの報告書を一部抜粋したものになります。

（資料に基づき委員長より内容説明）

もう一つの資料として、2023 年度コロナが収まりつつある中で、皆様と活動するためのたたき台として「石狩市社会教育委員の会議のためのメモ」を作成させていただきました。前回の会議でも様々なご意見をいただき、参考にしつつ作成したことになります。

（資料に基づき委員長より内容説明）

以上、説明しましたが、皆様のご意見をお伺いしたいので、よろしくお願いいたします。

（坂見委員）

木村委員長のお話を聞き、非常に納得する部分が多かったのですが、1 つは、地学協働の考え方があまり周知されていないという点です。これは我々、皆様の責任ではなくて、きっとコロナの影響などといった要因が重なってしまったからであると思います。

もしかすると、地域と学校がつながっていくという大きな目標の中に障壁があるのかなと感じています。

学校の状況をお伝えしますと、学校の前に家が無いんです。皆さまご存じかもしれませんが、高岡中学校・生振中学校・石狩中学校が統合するときに、いろいろな事情があって志美地区にな

ったのだと思いますが、回覧板を回すにもどうしたらよいのだろう、地域の方に力を借りるにはどうしたらいいのだろうといった課題が本校ではあるかもしれないという状況です。

そのような中で、私も社会教育委員の一人としてどう関わっていくべきか、地学協働推進委員の働きなどはコロナが収まってきた中で非常に重要になってくると思います。

そこで皆さまにお聞きしたいのですが、地学協働推進委員の役割や活動が市民の方にどれだけ認知されているのか、どのような活躍をされているのかなど、教えていただけたらと思います。

（木村委員長）

少なくとも私たち社会教育委員の会議で話題として取り上げたことはありません。

私も出口委員が CS の専門家なので、出口委員を通しての情報はありましたが、自分では共和町で講演を依頼されたときに道教委の報告書などを見て勉強しました。

様々な研究などを見てみると、地域住民がボランティアなどで「学校のお手伝い」をすることについてはそれなりに進んでいますが、地学協働というのはそれだけでは済まないと思いますので、地域の方々には「どういう子どもを育てるか」や「どういう学校になってほしい」ということも率直な話ができるような段階にならないかならないと思います。

そのためには社会教育がしっかりしていないと地学協働というのは成り立たないと感じています。大学の学生にも、CS についてはある程度浸透していると感じますが、地学協働についてはあまり伝わっていないと感じます。

これは私の意見ですが、皆様いかがでしょうか。

（二上委員）

一般市民の方が、特に小学生の子どもがいない家庭などが地学協働という考え方を知る機会はどう準備されているのかというのが一つあります。

もう一つは、子どものいる家庭の親に向けて地学協働の考え方を知る機会がどのように設けられているかということが気になる点です。

前回札幌市の事例としまして、回覧板に学校だよりが入っていることに対しての苦情の件についてお話しがあったのですが、確かにそう感じてしまうというのも理解できると感じました。というのも、学校だよりというの「生徒がこうしました」「こういった行事がありました」という事例だけが載っており、それだけを見ると関係ないと感じても仕方ないと思います。地域と一緒に子どもを育てるという考え方がどこかに入っているといいのですが、あまり見たことがないので疑問に感じました。

（木村委員長）

それは地域によって全然違うと思いますが、私は札幌市に住んでおりまして、直接子どもが居なくても、妻は回覧板に入っている学校だよりを見て時には学校のお手伝いをするといったことをしております。

（坂見委員）

道教委が施策として地学協働を動かしたのは3年ほど前になります。本庁の生涯学習課では、学校向けに地学協働の動きを活発にするということで予算付けされ動いたのが3年ほど前です。その前から国の施策としては動いています。そういった中なので正直学校の先生方も地学協働について語れるかと言われると恥ずかしいレベルだと思います。当然、学校のレベルとしても同じなので、地域でもおっしゃっているようなことが事実かと思います。

木村委員長がおっしゃったように、地域でも子ども会などに所属していると、若干でも話を聞いたことがあるとは思いますが、ただ、以前仕事で全道を回っていた際に、自治体で高齢化が進んでおり、青年部や子ども会なども子どもと積極的に関わることでできる年齢ではなくなっているというような問題を耳にしたことがあります。

そういった社会背景的な問題もあると思いますし、学校としても地学協働の考え方が浸透していないということもあります。

（山田治委員）

地学協働が浸透しないということの一つに、地域の過疎化が進んでおり、石狩ももちろんそうですが様々な地域で進んでいるということがあると思います。

もう一つは、経済活動と強く結びつくということです。共働きとなると非常に忙しく、地域活動が難しいと思います。ただ、共働きでなければ生活が苦しいといった現状もあり、非常に厳しい状態だと思います。これらの問題と高齢化には地域差があると思います。石狩では樽川地区などが非常に人口増加しており、南線小学校などは非常に人数が増えています。

石狩の住民は、ずっと住んでいても石狩の良さを知らない、歴史を知らないといったことが多く、石狩の良さを大人にも子どもにも地域全体にもっと知ってもらうことが改善のきっかけになると私は考えます。

（坂見委員）

山田委員のおっしゃる通りだと思います。来ていただける方が限られた方しか学校に来ていただけない。たまに遊びに来ていただける方はシルバー人材センターで昨年かかわりがあった方。つながりはあるのですが、もっと様々な年齢層の方（特に若い方）に入ってきていただきたい。またそれを学校側からのみアナウンスしてもなかなか来てくださらないので、地域のキーパーソンとなる地域学校協働推進委員の方々が少し頑張っていただくような仕組みや予算付け、また、そういった方々の育成などしていかなければならないと思います。

学校と地域の架け橋、いわゆるブリッジのような役割をしてくださるような若い世代の方に対して給料保障など色々なことを考えていかなければならないので、そういったところにも予算を使っていただけないかなと私は常々思っているところであります。

（二上委員）

そういうことは昔から要望がありまして、主任児童委員という制度ができ、その時にも地域・学校・親のつながりが欲しいといったことで作成されたと記憶しています。

ただ、その時の学校は保守的で外部の人たちが入ってくるのを嫌がるくらいがありました。た

だ、現在では坂見委員のように考えていらっしゃる方もいるということで、驚きと喜びがあります。しかし、なかなか受け入れられないのが実情であると思います。

先ほど石狩の魅力についてお話しされておりましたが、知識としては知っていますが、全然魅力的に感じない。それに関わる行政や市民が「石狩はこんなに素晴らしいところだ」と思うようにならないと、札幌などに行ってしまうと石狩で何かをしようという気持ちにはならないと思います。

また、学校と地域で考え方の差が大きいのではないかと非常に感じました。運動会などでも村や町の一大イベントではなく、どこか義務的な事務的に行われているような雰囲気を感じます。やはり地域と一体となる意識がお互いに無く、非常に差が生まれているのかと思います。

先生方の接し方も非常に難しいのかなと感じます。

（大橋委員）

只今、運動会の話が出たのですが、CSの運営についても地域によって課題が様々であるというのはその通りだと思います。浜益では、学校の運動会の時、保護者だけでなく地域の方々も多数参加します。運動会の他にも学校行事への参加が多くみられ、地域と学校のつながりが強いのが分かります。子どもたちもそのような地域と学校が一体となった中で育てられています。そのようなつながりが都市部や住宅地の地域でも広がっていくことを願っています。

前回の会議で、町内会に入らない人が増えているという話が出ていました。他との関わりを持つとしない傾向が出ていることが心配です。

（坂見委員）

今おっしゃられたような地域もある一方で、石狩中学校のような周囲に家が無い学校や反対に樽川のように周囲に家がたくさんある学校もあります。地域によって様々な差はあると思います。ただ、どの学校もいろいろな物事を発行だけで進めていくことに対して困っていることはあると思います。それを今誰が頑張っているかという点で教頭先生が頑張って解決している現状です。ただ、そこに地域学校協働推進委員のような方がいて学校の困りごとを地域に伝える、お子さんがいる家庭はお子さんを通じて伝えられるのですが、お子さんが居ない家庭・地域に対して伝える必要があると感じます。現在、教員住宅も学校の前にあることも少ない状況で、実際に私の学校でも石狩に住んでいるのはわずか数名といった状況です。

学校の困りごとを学校からだけ発信するのではなく、地域と学校をつなぐブリッジとなるような方から発信していただくのが大切だと思います。

ひと昔前に行われていた行事などを戻す動きもあるのですが、今求められている教育計画の中でできるものとできないものがあります。

運動会や学校祭など様々な行事がありますが、昔のように行ってしまうと教科書が終わらないというような状態になってしまっておりま。そういった中で規模感が小さくなってしまっているというのもあるということをご理解いただきたいと思います。

（二上委員）

よくわかります。昔に比べると科目数も増えているし、英語など教えることが様々あるのだろうと感じます。

だから今おっしゃられたようにブリッジになる、橋渡しとなるような役割をつくっていかねればならないと思います。地域によって差がありすぎるからできないというのも確かですが、やらなければ仕方がないと思います。

（坂見委員）

私はずっと石狩に住んでいたわけではありませんので、校長室にある古い文献を読みながら歴史を紐解いて理解しながら学んでいます。でも、もしそういったことを知っている方が地域にいて、お子さんが学校にいる世代の方が居れば、調べずとも直接お話を聞くことができるのかなと思ったり、いろいろな場面で困ったときに協力してくださるような方がいるんでしょうけれども、学校からの発信だけではそういった方々に協力していただくのは厳しいのかもしれないと感じています。

（出口委員）

私はどの立場でどういった発言をしたらよいのか微妙なところなのですが、今、大学生を日々教えている中で、もちろん学力も大事なのですが、社会人として生きていくためにはコミュニケーション能力であるとか、自発性であるとか、主体性であるとかといったことが非常に重要になると思います。

ただ、学生たちを見ているとその部分が非常にかけているように感じます。私が担当しているのは課題解決型学習なので、そのような力をどうやって身に着けるかをグループで議論させてプレゼン資料を作成させて発表させてといったことをしています。そのようなところでグループワークに参加できない学生が少なからずいます。

なぜそのような力がないのかというと、「小中高通じてグループワークをほとんどしたことがない」という学生もいるからであると思います。

これは小中学校でも取り組んでほしいことなのですが、やはり様々な人たちとコミュニケーションをとるべきであると感じます。いろいろな小中学校を見てきましたが、習志野の秋津小学校などは都会の真ん中なのですが、地域の方々がひっきりなしに出入りして、子どもたちと接するような状態です。

そういったものを見ていると、やはり家庭だけで教育を行うというのではなく、どれだけ多くの大人が関わることによって子どもの社交性が違ってくると思うので、そのことをしっかり伝えて、関係ないというのではなく、その地域に住んでいる以上は子どもたちがいい子に育ち、いい影響を与えてくれるということを理解してもらい、短いスパンではなく、20年30年後に地域を支える人材になってくれることを考えてみんなで関わっていきましょうという地学協働の考え方を伝えていかねばならないと思います。

できるだけ多くの大人と関わって子どもの世界を広げてあげることがとても重要なことであると思います。

札幌や東京に人口が集中するということですが、それは地域の文化・良さ・特性を知らないか

らなんです。どんなことを地域で行っているのか、どんないいところがあるのかなどを全然わかっていないということが大きいと思います。石狩にも石狩の人が知らない石狩の魅力がありますし、伝えていかなければ知っている人も増えないと思います。

そのような機会を増やすことで、地学協働とはどういう考え方で何をを目指すのか、多くの人に知ってもらわなければならないと思います。もともと協働という言葉はなぜ使ったのかといいますと、平成 20 年、2008 年に学校支援地域本部事業という形で地域の人にボランティアに来ていただいて「支援」という形でお手伝いいただいていたのですが、必ず言われるのが「我々は支援をして、学校は一体何をしてくれるんだ」ということで、それに対して何も言えないという状況になってしまい、協働という言葉を使用することになりました。確かに地域の人に来てもらい手助けしていただく形にはなります。それによって先生方にも余裕ができるということなのですが、そのできた余裕というのを子どもたちのために使うことができる。つまり、地域の方々にボランティア活動をしていただくと、ひいては子どもたちのためになるということだと学校の先生方も地域の方々も地域の宝である子どもたちを育てるために一緒に頑張りましょうということで「協働」という言葉を使うことになりました。「先生のために」ではなく「子どもたちのために」という考え方ができると地学協働という考え方はもっと浸透していくと思います。

まずは石狩の学校でどんなことが行われているかというのを我々は知らなければならないと思います。CS もどんどん広がっているのですが、形骸化が問題となっています。以前の学校評議員のように、学校の報告を受けて委員の人たちが意見を言って終わりというところで多くの学校がとどまっています。

本来 CS が目指すものは子どもたちの現状を踏まえてどんな活動をしたらいいのだろう、大人が関わっていくべきなのかなどどういった活動が必要なのかを委員の中でしっかりと話し合った上でどう実現させるかを議論するということだと思います。そこで議論したことが実現するために協働本部があります。ですから、CS と協働本部のどちらかではダメなんです。私が見たいのは石狩市の CS がきちんと形骸化せずに議論が行われているか、それを受けて協働本部がどんな形で動いているのかということです。それを聞いたうえでないと何をするということにはならないと感じています。

（山田委員）

現実的に学校教育・家庭教育・社会教育といろいろなものがありますが、昭和 50 年ごろはフランスのラングランが生涯学習を提唱したときに生涯学習というのがとても大きく広まりました。ところが現在ではなかなかそういうわけではありません。それはやはり教員の 40 時間残業で過労死ラインを超えて 80 時間ほどおこなっているという現状が影響していると思います。つまり、学校に余裕がなくなってしまうということです。だから地域も学校も変わっていかなければならないと考えます。バランスをとることが大切です。

一時期は「塾は家ですから、学校は勉強だけ教えてくれ」と言われたりもしました。また、「勉強は塾です」といったこともあります。このようなところを整理していかないと、どうにもならないのではないかと思います。

現在、私は市民カレッジにありますが、学校の先生で参加する方はゼロです。受講生は一般の

方がほとんどです。やはり学校とのギャップはとてもあると感じます。

まずはそのようなことから改善していかなければ、社会教育委員の会議で何を議論して何を決定してもあまり意味がなくなってしまうと思います。

やはり一年間終わった後で振り返り、「これができたな」というようなものがないと意味がないと思います。CS もまだ枠組みができただけですし、樽川に立派な児童館ができましたが、ゲームをしている子どもは多いです、学校と地域の差は大きいですし、課題は様々で非常に難しいと感じます。

（出口委員）

地域学校協働活動と社会教育の関係で私が耳にするのは、公民館や市民カレッジで学んだ成果を生かす場として学校支援ボランティアがあっているのではないかと思います。学校側からの求めで「こういった人材が欲しい」という呼びかけに対してそういった人材がいらない中でその知識を教えるような講座があるといった循環が地域学校協働活動と社会教育の連動性ということになると思います。このことは昔から言っているのですが、なかなか実現しないところであります。

（坂見委員）

私もその通りだと思います。例えば、石狩中の周りでは新幹線の土砂を受け入れて積んでいるのですが、とても砂埃が舞います。そのこと自体は仕方がないのですが、窓が汚れてしまうので水をかけてワイパーで掃除したりといったことが必要になります。そのようなことも学校の困りごととしてあります。定期的に行わなければならないのですが、学校だけでやるわけにもいきません。そういったときに私が地域の方に言ってもなかなか来てもらえないので、地域学校協働推進委員の方にボランティアを募ってもらったり、経験がないならば先ほど出口委員がおっしゃったように道具を貸してやり方を教えてというようなことができると思います。

山田委員がおっしゃられたように今回の取り組みは数値の目標が向かないものであると思いますので、「学校に対して何ができたか」「地域の人に対して何ができたか」「ブリッジとなる人に何ができたか」を指標としていくべきであると思います。

（木村委員長）

先ほど出口委員もおっしゃられていましたが、私としては実際に CS や地学協働の取り組みがどのようにどういった活動が行われているのか把握する必要があると思います。ただ、社会教育委員の会議では CS とは何か地学協働とは何かといったことを先に話したうえで行動すべきだと思います。

社会教育委員の方々でその事柄に詳しい方のお話を聞いてというよりも、例えば、市民の方々と一緒に CS や地学協働の現状、そして、そのことをどう進めていくべきなのかといったことを学べる講座を社会教育委員として主催するのもいいのではないのでしょうか。

（高橋委員）

私は子育て、町内会、地学協働、PTA、CS委員など様々なことに関わっているのですが、南線小学校と樽川中学校の方ではCSは動き出しています。さらに活発に動いていこうと、交通安全運動の回数を増やしたり、掛け算ボランティアなど、地域の方々の力を取り入れようと頑張っているのですが、私は南線小学校と樽川中学校しかわかりませんが、いろいろな学校の取り組みを把握しておくのも大切なことだと思いました。

また、子育てしている側の観点からは、コロナ禍でもっとも進んだのはスマホだと思います。私を含め仕事ができない時間は子どもたちと一緒にゲームする時間もありましたし、それに飽きたらやはり友達と遊ぶなど、スマホに集中するとそのみになってしまうのでそこが一番大きかったのかなと思います。

出口先生がおっしゃっているように地域協働も今すぐ結果が出るようなものではないと思います。関わることでできることから関わっていき広がっていくような形になるのが地学協働であり、すぐに浸透して結果が出るものではないと思います。

（松本委員）

現在、実際にCSに関わっているものとしての意見ですが、南線小は決して財産がないわけではないと思います。今までずっと掛け算のボランティアもリストアップしているなど、CSではないにしても、立派な実績であると思います。私が問題に思っていることは、コーディネーターにしても退職された先生方が多かったのが、一般の方も多く入ってきてよかったと思っている一方で、高齢化が非常に進んでいることです。跡継ぎを見つけなければならないのですが、なかなかそれが見つかりません。コーディネーターもCSもそうなのですが、アクティブに活動しているのは70代後半くらいの方が多い。地域でもコロナで中止していた行事を再開させようか悩んでいる要因の一つに「自分たちが高齢だから」といった理由もあるそうです。

（出口委員）

いい事例があるならば、それを一人でも多くの人に知ってもらいたいと思います。すべての学校が成功しているわけではないと思いますし。

（坂見委員）

成功している事例も「伝統でやっているからいい」なのか「今子どもをどう育てていきたいかにプラスになっている」なのかも考慮しないと、ただ単に伝統だから続けているということであればいずれ疲弊していくと思います。

（出口委員）

ずっとやっているという説明よりもこのような議論を委員で行って、こういう教育体制を作っていこうというのが立ち上がったという説明があればよいのですが、協働本部の事例発表をする「こういったことをやっている」という話しかしないので、あまり意味のないものになってしまっていると思います。

（坂見委員）

ある程度のストーリーは必要だと思います。でなければただの事例発表になってしまい、「じゃあうちではできないか」となってしまうだけだと思います。

（出口委員）

CS 委員でどんな議論をしているかを我々にしっかり伝えていただく必要があると思います。

（木村委員長）

地学協働を進めるうえでの独自の問題もありますし、高齢化が進み跡継ぎが居ないというのは市民活動全体に共通する問題です。ですので協働活動に限らずに、市民のために何かしますという人を増やして引き継いでいくということだと思います。

色々なお話をお聞きし、例えば浜益の ezorock (エゾロック) などは学生たちが自分から通っているわけです。地域のお年寄りやいろいろな人に聞き取りをしながら、地域の子もたちに知ってほしいことや歴史などを入れた教科書づくりなどを行っています。こういった一面を見ると高齢化や過疎化は無視できないという一方で若い人たちが様々な形で加わり、活動しているという面もあります。ですので、可能性や希望といったものを見つめながら、私たちはこの後どう行動していかなければならないかが大切だと思います。

どういった取り組みを行っているかを聞く取り組みは、社会教育委員の会議だけではもったいないように思います。市民カレッジの講座のような形をとってもいいですし、シンポジウムのようないい形でもいいです。そういうことを行ってみてはいかがかと思いますが、皆さんどうでしょうか。

（出席者同意）

（木村委員長）

積極的に参加してくださる方もいるみたいですので、そういう方向に進んでいきたいと思うのですが、進んでいくうえで留意してほしい点や、話をしてほしい人など、ご意見ありますか。

（坂見委員）

もし行うとするならば、従来のシンポジウムや講演のようなものでは意味がないと思います。例えば、南線小学校の事例が出たのであれば、教頭先生などに来ていただいたり、社会教育行政の方にも有識者の方にも来ていただいて、トークセッションをするであるとか、その場で質問に答えるといった形が必要なのではないでしょうか。予定調和の説明だけではなく、聞いている人も声を上げられて、その場で答えることができるという場にしなければ意味がないと思います。

（木村委員長）

社会教育の取り組みとしてはどういう形で行うかが学びなので、例えば今挙げた人が「こう

いった取り組みがあります」といった披露があって、それを聞くといった当日のみではなく、そこに至るまでのプロセスが我々にとって学びであると思います。

今とても良いご意見をいただいたので、そういった方向に進めていこうかと思います。

秋以降くらいのことになるとは思いますが、事務局と相談して進めていこうと思いますが皆さまいかがでしょうか。

（出席者同意）

（事務局）

今まで委員の方にいろいろ意見をいただいて、最後にトークセッション等というお話がありましたが、木村委員長がそれまでに至る過程も社会教育委員の役割ということで、10月頃に事業を社会教育委員の方々にいろいろと動いていくという認識でよろしいでしょうか。

（木村委員長）

その事業に向けての会議を社会教育委員の会議以外で持たないと準備ができないと思います。忙しいとは思いますが、全員が集まらなければならないというわけではありませんので、工夫して積極的に関わってくださる方を中心に進めていければと思っており、夏休みくらいの時期に呼びかけをしようと考えています。

皆様、今日は積極的なご意見をいただきありがとうございました。

ここで今日の会議を終了します。

議事録は上記のとおりであることを認めます。

令和 年 月 日

石狩市社会教育委員の会議 委員長 _____